

千代鈴完勝

紙相撲新聞

第156回本場所
八日目～千秋楽号

編集・発行
日本紙相撲協会

鹿富士追走も楽日出羽に苦杯 千代鈴は来場所綱獲りに挑戦

〔第一百五十六回本場所八日～千秋楽〕

8月14日に八日目と九日目、8月21日に十日目と千秋楽と2週連続で開催され、激戦の優勝争いに終止符が打たれた。

最後に賜杯を手にしたのは大関千代鈴。10勝1敗で2回目の優勝を果たした。終わってみれば、二日目に喜乃郷に敗れたのみの1敗で、勝った相撲は危なげのない相手を圧倒する勝ちだった。



↑千秋楽、鹿富士が敗れすでに優勝を決めていた千代鈴は、当面のライバルの大神楽を速攻で寄り切り二度目の優勝を飾った。



↑朝日松理事長より賜杯を受ける千代鈴。今場所の完璧な相撲内容に春日親親方もご満悦の様相だ。

ふりて強さを見せつけた11日間だった。

三賞は初日から3横綱を立て続けに破って千代鈴と千秋楽まで優勝を争った小結鹿富士が殊勲賞(3回目)と敢闘賞(2回目)をダブル受賞、新入幕で五日目まで全勝で優勝争いを引っぱった綱乃花が敢闘賞(初)を、技能賞は2横綱1大関を破った技能が光った鬼ヶ嶽が初めて受賞した。

七日目を終えた時点で大関千代鈴、平幕の照の王、綱乃花の3人が1敗で並んでいたが、八日目に照の王が千代鈴に敗れ、綱乃花が大関に敗れて大関千代鈴が単独トップに立ち、2敗は横綱若ノ嶋、大関大神楽、小結鹿富士、平幕の玄武岩、照の王、綱乃花の6人という状況となった。

優勝	殊勲賞	敢闘賞	技能賞	十両	三段	序二段	序口
千代鈴	鹿富士	鹿富士	綱乃花	龍ヶ崎	猿飛	音柱	桜庭
10勝1敗	8勝3敗	8勝3敗	7勝4敗	9勝2敗	5勝5敗	5勝5敗	5勝5敗
(2)	(3)	(3)	(初)	(初)	(初)	(初)	(初)

こうして迎えた十日目は、大関千代鈴が横綱春ノ翔と大関大神楽が、2敗の小結鹿富士と頭綱乃花が直接対決という大詰めを迎えた。



春ノ翔●(寄り切り)○大神楽



千代鈴○(寄り切り)●若ノ嶋

勝負は大神楽が左を差して優勢、さらに腰を落として勝利を確信した瞬間、若ノ嶋が捨て身の上手投げをみせると大神楽はもんどり打って土俵に転がった。「あ」と頭を抱えて悔しがれる大神楽の自力優勝も消え、ともに3敗となった。



若ノ嶋○(上手投げ)●大神楽

一方の友砂部屋もかつては横綱蛭勇、初代大関綱乃花がいて盛り上がりを見せたが、一時期は幕内力士がいなくなるといって苦しい時期があった。しかし、地道なスカウトと親方の指導の甲斐もあって、綱乃花を含め幕内力士4人にまで盛り返してきた。その中で一番期待する綱乃花が中日優勝から新入幕初優勝と大いに期待され、九日目まで星の差1つで優勝争いに食らいついている。



綱乃花●(引き落し)○鹿富士

「いや〜！緊張するなあ！」と鹿富士2回目の優勝のチャンスと落ち着かない様子の鹿賀乃戸親方。かつては横綱英、大関鹿皇、関脇黒雲山、隅田川、鹿乃浜と栄華を誇った鹿賀乃戸部屋だが、今場所の幕内は鹿富士と幕尻の黒雲海の2人だけ。しかも黒雲海はここまですの2勝7敗と十両陥落が決定的。自ずと鹿富士への期待が大きくなるのも当然のことだろう。

勝負は大神楽が左を差して優勢、さらに腰を落として勝利を確信した瞬間、若ノ嶋が捨て身の上手投げをみせると大神楽はもんどり打って土俵に転がった。「あ」と頭を抱えて悔しがれる大神楽の自力優勝も消え、ともに3敗となった。